小説フレームアームズ・ガール
最終話「光溢れる未来へ」

1. 城下町での死闘

これは随分と楽な仕事だと・・・彼らはシグルドに雇われた際に、誰もがそう思っていた。
市民に多少の死者が出ようが構わん、俺様がシルフィアたちをぶっ殺す邪魔をする者たちがいたら容赦なく殺せと・・・シグルドは彼らにそう告げていた。
それで戦闘に巻き込まれて死ぬような惰弱な市民など、強国たる我が帝国には不要なのだと。

だからこそアーキテクトたちが城下町に侵入してきた時も、ゼルフィカール部隊が援軍に来た時も、彼らは誰もが思ったのだ。
フレームアームズ・ガールだか何だか知らないが、警戒すべきは歴戦の勇者であるアーキテクトのみ。それ以外は所詮は実戦経験が1年にも満たない小娘共の集まり・・・しかもマテリアに至っては正規の軍人ですら無いのだ。
そんな彼女たちなど、死線を何度も潜り抜けて来た、豊富な実戦経験を誇る自分たちの敵では無いと・・・彼らは誰もがそう思っていた。
それにいざという時は、市民を人質にでも取って脅してしまえばいい・・・実際に彼らはシグルドから、その許可を正式に得ているのだ。

それなのに・・・何故こんな事になってしまったのか。

「くそが、くそが、くそが、くそが、くそがあああああああああああああっ！！」

傭兵たちがビームマシンガンを必死にマテリアに放つが、スティレット・リペアーの圧倒的な機動力の前にロックオンすらままならない。
そして彼らがマテリアに気を取られ過ぎている間に、いつの間にか背後に回り込んでいた迅雷が、ユナイトソードで傭兵たちを次々と斬り捨てていく。
慌てて傭兵たちは迅雷に向けてビームマシンガンを放つが、そんな彼らをリアナのビームマグナムが情け容赦なく貫いた。
そんなリアナを遠くから狙撃しようとした傭兵にマテリアが上空から急接近。ビーストマスターソードの刀身が鞭状に変化し、傭兵の首を絞め付ける。

「あがっ・・・！！」
「大人しく武器を捨てて投降して下さい。さもなくばこのまま貴方の首を切断しますよ？」
「わ、分かった・・・大人しく降参するから・・・だから・・・っ！！」

降参する素振りを見せながらも、隠し持っていたビームハンドガンでマテリアを撃とうとした傭兵だったが・・・次の瞬間、首が胴体から離れて宙を舞っていた。
普段の慈愛に満ちたマテリアからは想像も付かないような、冷酷な瞳・・・それを見せつけられた周囲の傭兵たちが思わずゾッとしてしまう。
マテリアはビーストマスターソードの刀身についた血を、指で掬って舐めたのだが・・・すぐにペッ、と不味そうに吐き出したのだった。

「・・・不味い。やっぱり吸うならシオンさんたちじゃないと。」
「この、バンパイア風情が・・・あがあっ！？」

慌ててマテリアをビームマシンガンで撃とうとした傭兵たちを、駆け付けたゼルフィカール部隊の少女たちがビームマシンガンで一網打尽にしていく。
そして背中合わせの状態になったマテリアとゼルフィカール部隊の少女たちが、互いに頷き合い・・・散開して傭兵たちの残存部隊の迎撃に向かったのだった。

即席のチームとはとても思えない程の、彼女たちの一糸乱れぬ連携・・・傭兵たちは完全に追い詰められてしまっていた。
苦し紛れに市民を人質に取ろうとするものの、彼女たちの統率された動きの前に、人質を取らせてすら貰えない。
数の上でも圧倒的優位に立っていたはずが、いつの間にか9割近くがアーキテクトたちによって叩きのめされてしまっていた。

「くそっ、何故だ！？俺たちはプロの傭兵なんだぞ！？それが何でこんな小娘共に、こんな・・・！？」
「侮ったな。戦闘のプロと言えども、貴官らは所詮は傭兵・・・一致団結する事を知らん。」

何の迷いも無い力強い瞳で、アーキテクトが生き残った傭兵たちにガンブレードランスを突き付け、はっきりと告げた。

「ここにいるフレームアームズ・ガールたちの方が、少々チームワークが上だったようだな。」
「・・・っ！？」

威風堂々と自分たちを見据えるアーキテクトたち、そして目の前で積み上げられている死体の山を前に、傭兵たちは焦りを隠せずにいた。
いかに戦闘のプロと言えども、彼ら傭兵はアーキテクトたちと違って何の信念も持たず、所詮は金の為に戦っているだけに過ぎない。
また彼らのその特性上、昨日まで味方同士として背中を預け合っていた者たちが、翌日には敵同士として殺し合う・・・なんて事も日常茶飯事だ。本当の意味でチームワークを発揮する事など出来るはずがない。
どれだけ優れた戦闘能力を有していようが、そんな彼らが揺るぎない信念を胸に戦うアーキテクトたちを相手に、最初から勝てるはずが無かったのだ。

「じょ、冗談じゃねえ！！こんな化け物共相手にこれ以上戦えるかぁっ！！」
「命あっての物種ってなぁっ！！」

生き残った傭兵たちが、次から次へと逃げ出していく。
彼らは何の信念も持たず、ただ金の為にシグルドに雇われて戦っているだけなのであって、命の危険に晒されてまでアーキテクトたちと戦う理由など何も無いのだ。
これが傭兵たちの限界・・・守るべき物の為に命を懸けて戦うアーキテクトたちとは、格が違う。

「お、おいお前ら！！」
「貴官はどうする？降伏か？死か？」
「ぐ・・・ぐぬうっ・・・！！」

ただ1人残された隊長格の男が歯軋りするが・・・やがて観念したのか手にしたビームマシンガンを地面に投げ捨て、両手を上げたのだった。

「分かった、俺は大人しく降伏する。正直お前らの事を舐めてたわ。」
「賢明な判断だな。よし、総員ただちにラザフォード中尉を援護に向かうぞ。あのインペリアルとかいう新型の性能は未知数だ。いかにラザフォード中尉といえども1人で戦わせるのは・・・。」

隊長格の男に背中を向けて、リアナたちに指示を出すアーキテクトだったのだが・・・そのアーキテクトに向けて隊長格の男が、突然隠し持っていたビームハンドガンの銃口を向けたのだった。

「・・・馬鹿が・・・っ！？」

だが発砲しようとした所で、アーキテクトのマナ・ビームハンドガンが隊長格の男の脳天を貫いた。
驚愕の表情のまま、どうっ・・・と地面に倒れる隊長格の男。即死だった。

「・・・馬鹿は貴官の方だ。あのような愚物の為にそこまで命を懸ける意味がどこにある？」

そこまでして金が欲しいのか・・・いや、それ程までのハングリー精神を持って、彼はアーキテクトに最後まで抵抗しようとしたのだろう。
コーネリア共和国の軍人として、公務員として、安定した収入を得ているアーキテクトとは違い、彼ら傭兵はフリーランスだ。収入が安定しているとは決して言えない。
ここまで命を懸けなければならない程までに、金銭的に切迫していたのか・・・それともラキウス同様にただの戦争中毒者なのか。
詳しい事情は知らないが、アーキテクトは隊長格の男の瞳と口をそっ・・・と閉じ、静かに冥福を祈ったのだった。

『オラトリオ少佐、周囲に残存部隊の反応はありません。シグルドの私兵の傭兵部隊は完全に壊滅しました。』

そこへゼルフィカール部隊のオペレーターの少女が、アーキテクトに通信を送って来た。

「これで残る脅威はルクセリオ公国騎士団とジークハルト殿だけか・・・シオンが何とか足止めしてくれているようだが・・・。」
『それとシルフィア様からの伝言です。市民の避難誘導はエルウィン隊に任せ、オラトリオ臨時小隊は苦戦しているカリン隊長の援護に向かって欲しいとの事です。』
「了解した。言われなくとも元よりそのつもりだったからな。」

あのインペリアルとかいう新型の性能もさる事ながら、シグルド自身も相当な使い手なのだろう。
そうでなければヴァルファーレを纏ったシオンを、自らの手で叩きのめすなどと軽々しく言えるはずもない。
それに、あのカリンでさえも苦戦させられる程の相手・・・アーキテクトたちも気を引き締めて掛からなければならないだろう。
その決意と覚悟を胸に秘め、アーキテクトは再びリアナたちに向き直った。

「・・・よし、総員ただちにラザフォード中尉の援護に向かうぞ！！」
「「「「「「「「「「「イエス、マム！！」」」」」」」」」」」

決意を胸に秘めた瞳で、リアナたちは一斉にアーキテクトに敬礼したのだった。

2. 女同士の意地の張り合い

ナナミが故郷のジャパネス王国を離れてルクセリオ公国に亡命したのは、6年前・・・16歳になったばかりの頃だった。
突如ジャパネス王国を襲った大震災と、それによって引き起こされた津波によって、ナナミは両親も弟も家も財産も全て失ってしまう。
当時隣国のルクセリオ公国が積極的に支援活動を行っていた事、そして肝心のジャパネス王国の上層部が、この有象無象の大震災を前に大混乱状態に陥り、軍による支援物資の配給すらまともに行われなかった事で、ナナミは「さすがにこれでは駄目だ」と完全にジャパネス王国を見限ったのである。

『食料や水はいつになったら届けてくれるんですか！？もうあと1日で底がつくんです！！』
『申し訳ありませんが、こちらも上層部からの指示が二転三転していて、動きたくても動けない状況なんですよ。自分たちで何とか出来ませんかね？』
『そんな、自分たちで何とかしろって・・・土砂崩れで道路が寸断されているんです！！それに私たちの中には怪我人も大勢いますし、中には足を骨折してる人だっているんですよ！？私が応急処置をしましたが、早く病院で適切な治療をしてあげないと！！』
『本当に申し訳ありませんが・・・出来るだけそちらまで救援活動を行えるよう、上層部に掛け合ってみますので・・・。』
『ちょ・・・！！』

避難所に指定されていた小学校の体育館で、電話越しにジャパネス王国軍を怒鳴り散らすナナミを、不安そうな表情で見つめている避難民たち。
そして設置されていた大型テレビでは、政府関係者が軍によって救助された事が大々的に放送されていた。
一体どうなってるんだ、上の連中はすぐに助けるのに、何で俺たちは後回しにされるんだ・・・そんな軍に対する不満が怒号となり、子供たちが涙を流しながら泣き喚く。

そして助けが来ないまま、1日が過ぎ・・・備蓄していた食料や水がとうとう底をついた。
避難民たちの将来への不安や、軍に対しての不満が限界まで高まり、とうとう爆発し・・・一部の避難民たちが発狂しながら、ナナミに集団レイプを働こうとしたのである。
極限状態に陥った事で、「ナナミに子供を産ませなければ」という種としての生存本能が暴走したのか、それとも助かる見込みが無い事で自暴自棄になってしまったのか。
そこへ間一髪で駆け付けたルクセリオ公国騎士団によって、ナナミは何とか犯される寸前の所で救われたものの、この事件は絶望したナナミの心に一生消えない深い傷を残す事になる。

結局自分たちを最後まで助けてくれなかった、ジャパネス王国の軍や上層部に失望したナナミは、そのままルクセリオ公国に亡命。
そして極限状態におかれた避難所での、冷静かつ適切な判断力を評価されたナナミは、軍のオペレーターを目指してみないかと士官学校への入学を勧められた。
別に強制はされなかったものの、それでもナナミには士官学校に入る以外に選択の余地は残されていなかった。

全寮制の士官学校なら、衣食住が全て保障される。それに将来軍に入隊する事を約束すれば、学費や生活費が全額支給される・・・家族も財産も全て失ってしまったナナミにとって、これ程魅力的な話は無かったのである。
士官学校を卒業後も軍に入らず、大学に進学したり一般企業に就職する者たちも決して少なくはない。実際に士官学校でもそういった者たちへの進学、就職のサポートも行っていた。
だがその場合は国から支給された学費や生活費を、全額返済しなければならなくなってしまう。それはとてもじゃないが震災で無一文になってしまったナナミには、到底無理な話だった。

かくしてナナミは士官学校を卒業し、オペレーターとして軍に入隊する事になる。
だがルクセリオ公国の城下町や軍の内部においても、ジャパネス王国出身で震災から逃れてルクセリオ公国に亡命したナナミの事を、興味本位の目で見る者たちも決して少なくは無かった。
どんな悲惨な状況だったの？大丈夫だった？・・・ナナミが避難所で受けた屈辱や心の傷を知りもせずに、根掘り葉掘りと当時の状況を興味本位で聞こうとする者たち。
彼らには決して悪気があった訳ではないのだが、それでもナナミにとっては苦痛以外の何物でも無かった。

そして1年前、中尉に昇進したシオンがシオン隊の隊長として小隊の指揮を任されるようになり、そこへ軍曹に昇進したナナミがシオン隊のオペレーターとして配属される事になる。
シオンは他の者たちと違いナナミの心情を理解し、ナナミに対して最大限の配慮をしてくれた。
シオン隊のメンバーに震災に関しての話題を、ナナミの前では絶対にしないように命じ、シオン自身もナナミに対して特別扱いは一切しなかったし、震災の話題は一切口にしなかった。
私から当時の状況を聞きたいと思わないんですか？ファミレスで2人で食事をした際に、ナナミはシオンにそう切り出してみたのだが、シオンからこんな言葉が返ってきたのである。

『君は自分の心の傷を僕にえぐって貰いたいのか？少なくとも僕にそんな趣味は無いよ。』

穏やかな表情でそう話すシオンに、ナナミは心の底から救われたような気がした。
ルクセリオ公国に亡命してからという物、そんな事を言ってくれたのはシオンが初めてだった。
ナナミが受けた心の傷を知りもしないで、興味本位で震災の事をしつこく聞いてくる者たちが多い中で、シオンだけはナナミの心情を理解し、最大限の配慮をしてくれたのである。
この人となら共に歩んでいけると、ナナミは心の底からそう思った。
そして、そんなシオンにナナミが惚れるのに、それ程時間がかからなかったのである。
それなのに・・・。

「それなのに、そんなシオン隊長を貴方は奪った！！だから私は貴方が許せないのよ！！そして私を見捨てたシオン隊長の事も！！」

エンゲージ・システムで自分の心の中を垣間見たスティレットに、ナナミが怒りの形相でペリルショットランチャーを乱射した。
マナ・ホーリービームシールドで必死に受け止め続けるスティレットだが、あまりの威力にイクシオンからの警告音が鳴り響き、スティレットの目の前の空間に警告を示す画像が映し出される。

複雑な変形機構を搭載した事で、単機であらゆる状況に対応出来る万能機となったフレズヴェルク。しかしそれ故の生産性の悪さ、メンテナンスの煩雑さ、そもそも使いこなせる者が少ないといった問題があった事で、結局試作機が1機作られただけに留まっていた。
だがその基本性能はゼルフィカールやスティレット・ダガーを上回っており、それにナナミ自身の高い技量も加わった事で、スティレットは苦戦を強いられていた。

だがそれでもスティレットは、一歩も引かない。
ナナミの心情や想いは理解したが、だからと言って今更シオンを譲るつもりなど無いのだから。

「私だってシオンさんに身も心も救われたんです！！私もシオンさんの事が好き！！愛してる！！だからキサラギ曹長にシオンさんは渡さない！！」

何とかナナミに接近したスティレットが、マナ・ホーリービームサーベルをナナミに浴びせる。
それをテイルブレードで受け止めたナナミが、スティレットと鍔迫り合いの状態になる。
そのまま鍔迫り合いの状態のまま、睨み合う2人。

「大体、私にシオンさんを取られたからってシオンさんを殺すとか、そんな物騒な人に尚更シオンさんは譲れません！！そもそもアレン伍長にシオンさんを取られたら、貴方はアレン伍長を殺したんですか！？」
「殺す訳がないでしょう！？同じ隊に所属する大切な仲間なのよ！？私だってマチルダ伍長だったら仕方が無いと思っていたわよ！！私は貴方だから許せないのよ！！」

スティレットを弾き飛ばしたナナミが、ペリルショットランチャーを最大出力で発射する。
それをマナ・ホーリービームシールドで受け止めるスティレットだったが、あまりの威力に吹っ飛ばされてしまう。
その隙を狙い、フレズヴェルクをサイドワインダー形態に変形させたナナミが、スティレットの背後に超高速で回り込んだ。

「くっ、飛行形態にも変形を・・・！！」
「これで終わりよぉっ！！」
「まだです！！」

再びフレズヴェルクをフレームアーム形態に変形させ、体勢を崩したスティレットにテイルブレードで斬りかかるナナミだったが、それを読んでいたスティレットが背中の翼を閉じて盾代わりにして、ナナミの斬撃を受け止めた。

「な・・・！？そんなでたらめな使い方を・・・！！」
「私はまだ終われない！！シオンさんとの未来を掴む為にも！！」

ナナミの一撃でイクシオンの翼に亀裂が走るものの、それでもスティレットは空中で身体を反転させて、イクシオンの翼でナナミのテイルブレードを弾き返した。
そして体勢を崩したナナミに、至近距離からマナ・ホーリービームサーベルを放つ。

「はあああああああああああああああああああああっ！！」
「うわあああああああああああああああああああああっ！！」

立て続けに浴びせられたスティレットの斬撃によって、フレズヴェルクを損傷させられたナナミが遂に地面に叩き付けられた。
うずくまるナナミの首元に、スティレットがマナ・ホーリービームサーベルの剣先を突き付ける。
死を覚悟して目を閉じるナナミ・・・だがスティレットはナナミに止めを刺さず、マナ・ホーリービームサーベルを懐に収めたのだった。
予想外の出来事に、ナナミは戸惑いを隠せない。

「・・・な、何故・・・！？どうして私を殺さないの・・・！？」
「貴方が死ねば、シオンさんはきっと悲しむだろうから・・・私はシオンさんの悲しむ顔を見たくない。だからキサラギ曹長。貴方はこれからも生きて下さい。生きて幸せを掴み取って下さい。」

戦場に出るからには、兵士というのは単なる一戦闘単位に過ぎない。だから殺そうが殺されようが文句を言われる筋合いなど無い。これはシオンもスティレットもナナミも、士官学校で教官から散々しつこく叩き込まれた事だ。
だからこそシオンもスティレットもナナミも、それを覚悟の上で戦場に出ており、仮にここでどちらかがどちらかを殺したとしても、シオンは悲しみはしても決して殺した方を恨みはしないだろう。それはスティレットもナナミも充分に分かっていた。
だがそれでもスティレットは、ナナミを殺さなかったのだ。

「私に同情するつもりなの！？貴方にそんな事されたって、私には屈辱でしかないわよ！！」
「それにシオンさんにもさっき言われましたよね？自分の命を粗末に扱う事だけは絶対に許さないって。」
「・・・っ！？」

スティレットの言葉で、ナナミが驚愕の表情になる。
それはシオンがルクセリオ公国騎士団に所属していた頃から、シオン隊のメンバーに口酸っぱく言い聞かせてきた事だ。
自分の命を粗末に扱うのは許さないと。友と明日の為に戦えと。
それを言われたら、さすがのナナミも言い返す事など出来るはずが無かった。

「・・・卑怯よ、貴方は・・・！！そんな事を言われたら、私は・・・！！」
「キサラギ曹長。そんなにシオンさんが好きなら、さっさと私みたいにシオンさんとエッチして、身も心も言い逃れ出来ないように、既成事実を作っちゃえば良かったじゃないですか。」

損傷したイクシオンの翼を外したスティレットが、再びアレキサンダーとドッキングする。

「私だってやれる物ならとっくにそうしてたわよ！！そんな事をしたらシオン隊長の立場が悪くなるに決まってるでしょうが！！無神経な貴方と一緒にしないで頂戴！！」
「そんなのは、ただの言い訳ですよ。ただ単に貴方に勇気が無かっただけです。それこそシオンさんと相談して、一緒に乗り越えようとは思わなかったんですか？」
「・・・は、ははは・・・貴方、意外に情け容赦のない事をズケズケと言うのね・・・。」
「私はもう行きますね。シオンさんを助けに行かないと・・・。」

アレキサンダーとドッキングしたスティレットが、大急ぎでシオンの救援に向かう。
その威風堂々とした姿を、ナナミがとても悔しそうに見つめていたのだった。

3. 史上最強の親子喧嘩

パワードスーツ・ルクスの圧倒的な火力、そしてジークハルト自身の高い戦闘能力の前に、ヴァルファーレを身に纏ったシオンでさえも苦戦を強いられていた。
その圧倒的な武力とカリスマ性によって、ただの二等兵から国王にまで上り詰めたジークハルト。

その強さはシオンに「あの人を殺すなんて常人には到底無理だ」と言わしめた程だ。
　かつて両親に捨てられたシオンを救ってくれた、大恩あるジークハルト・・・そのジークハルトが悲壮な運命によって、今度はシオンの最大の敵として立ちはだかっている。
　だがそれでもシオンは、ここで引く訳にはいかないのだ。
　シルフィアを、そしてグランザム帝国の人々を、ルクセリオ公国騎士団から守る為に・・・この10年も続いた愚かな戦争を止める為にも。

「ぐうっ・・・！！」

　ジークハルトが放ったハイパービームマシンガンを、何とかマナ・ハイパービームシールドで受け止め続けるシオン。
　だがあまりの威力にヴァルファーレからの警告音が鳴り響き、シオンの目の前の空間に警告を示す画像が映し出される。
　シオンは何とかジークハルトを振り切ろうとするものの、極限まで磨かれたヴァルファーレの機動性をもってしても、ジークハルトの正確無比の射撃からは逃れられなかった。

「行け！！フェザーファンネル！！」

　それでもシオンは諦めず、翼に装填された12基のフェザーファンネルの内、4基を一斉にジークハルトに飛ばすが・・・。

「何だ貴様のその軟弱な武装は！？貴様も男なら自らの腕で勝負せんかぁっ！！」

　多くの帝国兵を叩きのめし、ゼルフィカール部隊をも苦戦させ、スティレットの力を借りたとはいえカリンさえも撃墜したフェザーファンネルでさえも、ジークハルトには全く通用しなかった。
　繰り出されたオールレンジ攻撃をもろともせず、ジークハルトはハイパービームサーベルで、フェザーファンネルを次々と叩き壊していく。

（全く、この人は本当に人間なのか・・・！？）

　呆れながらもシオンはジークハルトに言われた通り、マナ・ハイパービームサーベルでジークハルトに斬りかかった。
　互いの剣がぶつかり合い、2人の間にバチバチと火花がほとばしる。
　だがパワードスーツ・ルクスの圧倒的なパワーの前に、シオンは完全に押されていた。

「くっ・・・サーベルのパワーが負けている・・・っ！！」
「貴様に討たれるならば本望だと私は思っていたが・・・どうやら器では無かったようだな！！シオンよ！！」
「陛下ぁっ！！」

　シオンに向けて放たれる、凄まじい『殺気』。ジークハルトはシオンを本気で殺すつもりなのだ。
　グランザム帝国を完膚なきまでに叩きのめす・・・その自らに課した使命、今更曲げる事の出来ない覇道を達成する為に、その障害と成り得るシオンを排除する為に。
　たとえ息子同然に育て上げたシオンだろうと、敵として立ちはだかるなら決して容赦はしない・・・その悲壮な覚悟をシオンは敏感に感じ取っていた。

　そう・・・戦場に出るというのは、そういう事なのだ。

たとえ肉親や親友、恋人が相手だろうと、敵である以上は戦って排除しなければならないのだ。
だからシオンはスティレットがグランザム帝国軍にいた頃に、君を殺したくないから軍を辞めてくれと持ち掛けたのだし、そもそもジークハルトがシオンを殺すつもりだという事も、シオンは最初から承知の上だ。
承知の上でシオンは、こうしてジークハルトの前に立ちはだかっているのだ。
その2人の悲壮な戦いを、マチルダもオスカルもリックも、かつてのシオン隊のメンバーたちも、悲しみの表情で見つめていた。

「陛下、シルフィアならグランザム帝国を、必ず良き方向へと導いてくれるはず！！そしてラザフォード中尉なら、必ずシルフィアをシグルドから守り抜いてくれる！！それは陛下だって理解しているはずでしょう！？」
「最早誰が新たな皇帝となろうが、私は一切の容赦をするつもりは無い！！一切の弁明を聞くつもりも無い！！帝国を完膚なきまでに滅ぼす！！それが私が果たさねばならぬ天命なのだぁっ！！」

シオンを弾き飛ばしたジークハルトが、ハイパービームマシンガンをシオンに向けて乱射する。
それを何とかマナ・ハイパービームシールドで受け止めるシオン。
やはりジークハルトは強い。それにヴァルファーレさえも凌駕するパワードスーツ・ルクスの火力は驚異的だ。認めたくはないがシオン1人だけでは荷が重過ぎた。
ナナミを撃破したスティレットが救援に駆けつけるまで、あと5分といった所か。

（それまで時間を稼ぐか・・・！？いや、それでは僕の方がジリ貧になるか・・・！！）
「貴様の事だ！！リーズヴェルト中尉が駆け付けるまで時間を稼ぐつもりなのだろう！？だが貴様には最早その猶予さえも与えん！！このまま一気に叩きのめしてくれるわぁっ！！」

マナエネルギーを動力源とする事で無限稼働を実現しているヴァルファーレと違い、バッテリーで稼働しているパワードスーツ・ルクスでは、どうしても稼働時間に制限が生じてしまう。
だからこそジークハルトは、そうなる前に一気に決着を付けるつもりなのだ。
いくらヴァルファーレさえも上回る火力を誇るパワードスーツ・ルクスと言えども、バッテリー切れを起こしてしまえばただの鉄の鎧同然となってしまう。
それでもジークハルト程の強者ならば、並の敵が相手なら素手で充分渡り合えるが・・・今ジークハルトが相手にしているのは英雄とまで呼ばれているシオン、そして究極最強のフレームアーム・ヴァルファーレなのだ。
バッテリー切れを起こしてしまえば、ジークハルトの負けだ。

右手でハイパービームマシンガンをシオンに向けて乱射しながら、ジークハルトは左手で懐からハイパーグレネードを取り出し、シオンに投げつけた。
それがシオンの目の前で派手に爆発し、防ぎ切れなかったシオンが吹っ飛ばされてしまう。
爆発と同時に後方に飛ぶ事で衝撃を和らげたシオンだったが、それでもダメージを受けてしまったようだ。
あまりの威力に、ヴァルファーレのあちこちに亀裂が走ってしまっていた。

「くっ・・・！！」
「やはりそのフレームアームは火力と機動性を極限まで高めた代償として、装甲の防御力が犠牲になってしまっているようだな！！メッキが剥がれてしまえば脆い物よ！！」

体勢を崩したシオンに、さらにジークハルトがハイパービームマシンガンで追撃を掛ける。

ジークハルトは決してシオンを侮らない。幾ら優位に戦いを進めているからといって決して油断はしない。
認めざるを得ないが、純粋な剣術ならシオンの方が上なのだ。下手にハイパービームサーベルで斬り合えば、番狂わせが起きてしまう可能性がある。
心底悔しいが、それは先程シオンと剣をぶつけ合った時に確信させられていた。
だからこそジークハルトはこのまま距離を取って、シオンに剣を取らせないまま終わらせるつもりなのだ。

「最早リーズヴェルト中尉の救援も間に合わん！！貴様は今ここで朽ち果てるのだ！！」

放たれるハイパービームマシンガンによって、ヴァルファーレの装甲が少しずつ削られていく。
直撃を食らって大破した肩の装甲が、力無く地上へと落下していく。
ヴァルファーレの装甲に亀裂が走り、ボロボロにされていくシオン。
だがそれでもヴァルファーレは死なない。そしてシオンも決して諦めてはいなかった。

「これで終わりだ！！死ねい、シオン！！」
「まだだぁっ！！」
「なっ・・・ぐあああああああああああっ！？」

突然ジークハルトの真下から放たれた無数の緑色のビームが、ジークハルトのハイパービームマシンガンを貫いた。
慌ててジークハルトに投げ捨てられたハイパービームマシンガンが、ジークハルトの目の前で派手に爆発する。
まさかスティレットの救援が間に合ったのか・・・いや、パワードスーツ・ルクスのレーダーには何の反応も無い。
慌ててジークハルトが、ビームが放たれた真下を見降ろすと、そこにあったのは・・・いつの間にか空中に設置されていた4基のフェザーファンネルだった。

「馬鹿な！？フェザーファンネルだとぉっ！？何故あんな位置にぃっ！？」

ジークハルトはシオンと交戦しながらも、翼に装填されたフェザーファンネルを警戒し、決して目を離さなかった。
12基のフェザーファンネルの内、4基は大破させた。残る8基のフェザーファンネルもヴァルファーレの翼からは一度も分離していなかったはずだ。
ではあの4基のフェザーファンネルは、一体全体どこから湧いて出て来たというのか。

「陛下ああああああああああああああああああああああああっ！！」

戸惑うジークハルトに考える余地さえ与えず、シオンがマナ・ハイパービームサーベルを手に斬りかかった。
慌ててそれをハイパービームサーベルで受け止めるジークハルトだったが、さらに上空から4基のフェザーファンネルがジークハルトに襲い掛かった。
またしても有り得ない方角からの攻撃に反応出来ず、直撃を受けたジークハルトが地上へと吹っ飛ばされてしまう。
ヴァルファーレの翼に装填されている8基のフェザーファンネルは、未だ分離されてはいない。

「な、何故だ！？これは一体・・・ま、まさか貴様・・・！！」

地上に吹っ飛ばされながらもジークハルトは、シオンの作戦を瞬時に理解したのだった。
今現在ヴァルファーレの翼に装填されている8基のフェザーファンネルは、確かに「ジークハルトとの戦闘では」一度も分離していない。
では今ジークハルトを襲った、本来有り得ない8基のフェザーファンネルは、一体全体どこから飛んで来たのか。

それはジークハルトがアレキサンダーを撃墜した際に、シオンが爆風に紛れさせてとっさに飛ばして隠していた、アレキサンダーに搭載されていた予備のフェザーファンネルだったのだ。
まんまとシオンに一杯食わされた・・・ジークハルトは「ヴァルファーレの」フェザーファンネルは確かに警戒していたが、撃墜したアレキサンダーに関しては完全に無力化した物だと判断し、全く警戒していなかったのだ。
今までシオンが8基のフェザーファンネルをヴァルファーレから分離させなかったのは、密かに隠していた8基のフェザーファンネルの存在を、ジークハルトに悟らせない為だったのだろう。
驚愕しながら地上に落下するジークハルトのハイパービームサーベルを、追撃するシオンのマナ・ハイパービームサーベルが弾き飛ばす。

「お、おのれシオン・・・！！」
「これで、終わりだあああああああああああああああっ！！」
「ぐあああああああああああああああああああああああっ！！」

シオンのマナ・ハイパービームサーベルによる一撃が、遂にジークハルトのパワードスーツ・ルクスを粉々に粉砕したのだった。

4. 戦う理由

シオンがジークハルトを撃墜した事で、ルクセリオ公国騎士団は事実上敗戦し・・・城下町への脅威は取り敢えず去ったと言えるだろう。
だがそれでも、また終わってはいない。
シルフィアとシグルド・・・このグランザム帝国の次期皇帝の座を巡っての、正当な皇位継承者同士による争いは、まだ終わってはいないのだ。
この期に及んでも尚、ルクセリオ公国との戦争継続の意思を表明し、その障害となるシルフィアを何としてでも抹殺しようとするシグルド。彼だけは何としても今ここで討たなければならないのだ。
グランザム帝国・・・いや、この混迷に満ちた世界を、真の平和へと導く為に。

だがヴァルファーレを纏ったシオンを自らの手で討ち取ると、自信満々に語るだけはある。
新型フレームアームのインペリアルの力、そしてシグルド自身の強さも圧倒的で、カリンは完全に苦戦を強いられていた。
シュナイダーのような口先だけが達者の男とは、格が違う・・・シグルドはまさしく正真正銘の武人なのだ。カリンはそれを思い知らされていた。

「はっはっはーーーーー！！中々やるではないか！！さすがは帝国軍最強の剣士と呼ばれているだけの事はあるなぁっ！！」
「くっ・・・！！」
「やはり戦いとは、こうでなくてはな！！強者との戦いは血沸き肉躍るわぁっ！！」

シグルドが繰り出すビームランスを、辛うじてビームサーベルで受け止め続けるカリンだったが、シグルドの優れた槍術、そしてインペリアルのパワーの前に完全に押されてしまっていた。
カリンが身に纏うゼルフィカールから警告音が鳴り響き、カリンの目の前の空間に警告を示す画像が映し出される。
このインペリアルは火力だけなら、間違いなくヴァルファーレさえも凌駕する代物だ。正面からまともにぶつかり合えばカリンの方がジリ貧になるだろう。

カリンは一旦間合いを離しビームガトリングガンを放つが、それをシグルドはガンシールドで易々と受け止める。
逆にガンシールドから放たれた無数のビームが、カリンのゼルフィカールに少しずつダメージを与えていた。
あまりの威力に、ビームシールドでも完全に防ぎ切れないのだ。

「喜べラザフォード中尉！！貴様は価値のある女だ！！この俺様直々に死を与えられる価値がなぁっ！！」
「私はまだ死ねないわ！！リアナたちの為にも、そして何よりもシルフィアを守る為にも！！」
「あんな戦場で腰を抜かして逃げ出すような臆病者に、何の価値がある！？」
「価値があると思ったからこそ、私はシルフィアを全力で守るのよ！！」

シルフィアはカリンの足手まといにならないようにと、護衛の帝国兵に守られながら、再び城の指令室にまで避難していたのだ。
カリンの戦いぶりをモニター越しに、とても心配そうな表情で見つめている。
それをシグルドは「逃げた」「臆病者」などと批判していたが、それが今のシルフィアがカリンにしてやれる精一杯なのだ。
そしてそのシルフィアの判断があったからこそ、カリンはこうして何も気にせずに、シグルドと全力で戦う事が出来ているのだ。

「シグルド、貴方は一体何の為に戦うの！？何の為にルクセリオ公国との戦争を続けようとするの！？これ以上の戦いに一体何の意味があると言うのよ！？」
「そんな物は決まっておろうが！！我が帝国を強国たらしめる為！！この世界全てを帝国の支配下に置く為よ！！」
「貴方もシュナイダーと同じ様に、世界征服でも企むつもりなの！？」
「歯向かう者は力で屈服させる！！この戦乱の世の中で帝国を守るにはそれが最善手だと、貴様程の女が何故それに気が付かんのだぁっ！？」

シグルドのガンシールドが、カリンのビームガトリングガンを粉々に粉砕した。
カリンは懐からビームハンドガンを取り出しシグルドに撃つものの、それでも元々牽制用の武器であるビームハンドガンでは、インペリアルには傷1つ付けられない。
まさに絶対障壁とまで呼べる程の、立ち向かう者に絶望すら与える程の、圧倒的なインペリアルの防御力・・・だがそれでもカリンの目はまだ死んではいなかった。
まだ諦める訳にはいかない。まだカリンは今ここで死ぬ訳にはいかないのだ。

ゼルフィカールがインペリアルよりも優れている点・・・それはヴァルファーレにもそれなりに対抗出来ていた機動力だ。
バランスが取れた扱いやすい汎用機として設計されたゼルフィカールと違い、インペリアルは火力と防御力を極限まで追求するあまり、機動性が犠牲になってしまっている。

その機動力という数少ない利点を生かせば、カリンにもまだ勝機はある。
どれだけ強力な一撃だろうと、当たらなければどうという事は無いのだ。
そういう意味ではシグルドは、まだシオンに比べたら戦いやすい相手だと言える。

「やっぱり貴方に比べたら・・・シルフィアの方がまだ遥かにマシよぉっ！！」

シグルドの周囲を高速で飛び回り、カリンはシグルドを翻弄する。
ビームサーベルでシグルドに斬りかかり、ビームランスやガンシールドで受け止められたら即座に高速離脱。シグルドに決して的を絞らせない。

「ええい、ちょこまかと鬱陶しい女だ！！・・・ん？」

だが運命というのは、一体どこまでカリンに残酷な仕打ちをするつもりなのか。
母親に捨てられ、父親に借金を勝手に押し付けられ、風俗店で屈辱的な思いをしながら働かざるを得なくなり、さらには帝国の大人たちに騙され、利用され続けるなど、これまでの人生で悲壮な運命に翻弄され続けたカリン。
その絶望を乗り越え、シルフィアという希望をようやく見出したカリンに、運命というのはどうしてここまで残酷な仕打ちが出来てしまうのか。

カリンとシグルドの目に映ったのは・・・突然現れた、逃げ遅れた1人のメイドの少女。
彼女は確か最近入ったばかりの見習いで、城の給仕の仕事をしていた少女だ。カリンは彼女には何回か世話になった事があるのだが。
何を思ったのかシグルドは突然ニヤけた表情になり・・・突然ガンシールドの銃口を少女に向けたのだった。
予想もしなかった出来事に、絶望を隠せない少女。

「ひいっ！？」
「ふはははははは！！死ねい！！」
「くっ、そうはさせないわよ！！」

ガンシールドから放たれたビームが、情け容赦なく少女に襲い掛かったのだが・・・慌ててカリンが少女の前に立ちはだかり、放たれたビームを次々とビームサーベルで弾き、少女を守った。
だがあまりの威力に受け切れず、カリンはビームサーベルを弾き飛ばされ、吹っ飛ばされて壁に叩き付けられてしまう。

「ぐあああああっ！！」
「ラザフォード中尉ぃっ！！」

直撃、被弾。
カリンが身に纏うゼルフィカールに無数の亀裂が走り、無惨にも火花が飛び散っている。
泣きそうな表情でカリンを介抱する少女を、シグルドがニヤニヤしながら睨み付けていた。

「わ、私を庇って・・・ラザフォード中尉・・・そんな・・・！！」
「ふはははははは！！ラザフォード中尉が負傷したのは貴様のせいだぞ！！貴様がトロトロと逃げ遅れてノコノコとこんな所までやってきたせいで、ラザフォード中尉は貴様を庇わざるを得なくなってしまったのだ！！」
「まさか、ラザフォード中尉が私を庇う事を狙って・・・！？酷い！！どうしてこんな酷い事を出来

るんですかぁっ！？」
「この甘ちゃんが！！戦場でそんな言い訳が通用するとでも本気で思っているのかぁっ！？」

目に涙を浮かべながら自分を睨み付ける少女を、シグルドが鬼の形相で一喝したのだった。

「ゆとり世代の貴様らに、戦場で最も大切な事は何かを教えてやる！！それは勝つ為には手段を選ばん事だぁっ！！」
「手段を選ばないって・・・そんな・・・！！」
「戦場は遊びではない！！ルールなど存在しない、敵と殺し合いをする場所なのだ！！敵を討ち、味方を守る為ならば、どのような卑劣な手を使ってでも敵を殺さねばならんのだぁっ！！」

シグルドに言わせれば、逃げ遅れてこんな所までノコノコとやってきた少女が悪いのだ。
少女を守る為にカリンは持ち味の機動力を封じてまで、シグルドの攻撃を真正面から受け止めてまで、身体を張って少女を庇わざるを得なくなってしまった。
つまりはカリンが被弾したのは、少女が逃げ遅れたせい・・・全てはこの少女の責任なのだ。
それをシグルドに思い知らされた少女は、深く責任を感じてしまい・・・大粒の涙を流しながら倒れているカリンを見つめていたのだが。

「・・・戦場にルールなど存在しない・・・か・・・それは違うわよ、シグルド・・・！！」

何とか起き上がったカリンが、よろめきながらも何とか立ち上がる。
そして目から大粒の涙を流しながら自分を見つめる少女に、カリンは背一杯の笑顔を見せた。

「ラザフォード中尉・・・ご、ごめんなさい・・・私の・・・私のせいで・・・！！」
「大丈夫よ。ゼルフィカールはもうボロボロだけど、私自身の怪我は大した事は無いから。」
「だけど、私のせいで・・・私のせいで・・・っ・・・！！」
「私はこの国の軍人よ。軍人が自国の民を命懸けで守るのは当然でしょ？」

自分が足手まといになってしまった事に責任を感じる少女を、全く責めようとしないカリン。
そんなカリンの姿を、シグルドがとても不満そうな表情で睨み付けていたのだが。

「俺様の言う事が違うだと！？一体何が違うというのだ！？」
「戦意を失い投降した敵兵士は丁重に扱わなければならない、除隊を希望する自国の兵士に戦闘行為を強要してはならない、洗脳や人体実験などの非人道的行為も禁止、その他モロモロ・・・国際条約で定められているはずよ。」
「フン、それがどうしたと言うのだ！？そんな下らない国際条約など、この俺様が・・・」
「そして、自国の民を守る為に戦う・・・それが軍人が戦場で守らなければならない、軍人に課せられた必要最低限のルールよ！！」

とても厳しい表情で、カリンはシグルドを睨み付けていた。
今、ようやく確信した・・・やはりシグルドに人の上に立つ資格など無いと。
そしてだからこそ、今この場でシグルドを、何としてでも討たなければならないのだと。
この国を守る為に・・・そして10年も続いたこんな下らない戦争を終わらせる為に。

「貴方は私に勝つ為に、貴方が本来守らなければならない彼女を殺そうとした！！自国の民まで殺そうとした貴方に、皇帝を名乗る資格なんか無いわよ！！」
「まさに笑止！！強国たる我が帝国に、避難命令が出ているのに逃げ遅れるような、そのような

足手まといのノロマなど不要！！弱者など要らぬ！！必要なのは強者なのだ！！」
「結局、弱者は強者に蹂躙されるしかない・・・そう思っていた時期が私にもあったわ。私も自分自身の弱さのせいで、今まで悲惨な目に遭ってきたから・・・だけど今は違う！！」

ビームハンドガンの銃口をシグルドに向けながら、カリンは威風堂々と、何の迷いも無い力強い瞳で宣言したのだった。
カリンの脳裏に映ったのは、シルフィアの、そしてリアナたちの笑顔。

「今の私には命懸けで守りたい人たちがいる！！その人たちの為に私は戦う！！それがこれからの私の戦う理由よ！！」
「貴様の口上は実に見事だ！！だがそんなボロボロの機体で何が出来る！？翼をもがれた鳥は最早飛ぶ事すら叶わぬ！！今の貴様には億に1つも勝機は無いわぁっ！！」

ビームガトリングガンもビームサーベルも失い、ゼルフィカールもボロボロ。
確かにこんな状態では、今のカリンに勝機など無いかもしれないが。
いや・・・「カリン1人だけなら」、確かに完全に詰みだっただろう。
そう、今のカリンには、かけがえのない仲間がいる。
今のカリンは・・・もう1人では無いのだ。

「・・・戦場において最も大切なのは、勝つ為に手段を選ばない事・・・確かに貴方はそう言っていたわよね。」
「然り！！だが今の貴様に一体何が出来るというのだ！？」
「だったら私も遠慮無く・・・手段を選ばずにやらせて貰う事にするわ。」
「何だと！？貴様、一体何を言って・・・っ！？」

その瞬間、インペリアルから鳴り響いた、自分がロックオンされた事を告げる警告音。
慌ててシグルドが上空を見上げると・・・そこにいたのは自分に銃口を向けるアーキテクトたちの姿だった。

「総員撃ち方始め！！ラザフォード中尉を援護する！！」
「「「「「「「「「「「「「「イエス、マム！！」」」」」」」」」」」」」」」」

放たれた一斉射撃を、慌ててガンシールドで受け止めるシグルド。

「ぬうっ、もう全滅させられたとでも言うのか！？あの傭兵共も使えん連中だ！！だがこの程度でこの俺様を倒せると思うなぁっ！！」

ガンシールドから放たれた無数のビームを辛うじて避け、地上へと降り立つアーキテクトたち。
そして散開してシグルドを取り囲み、全方位から一斉射撃を繰り出す。
だがそれでも強固な防御力を誇るインペリアルには、決定的なダメージを与えられない。
全方位にビームバリアを展開し、アーキテクトたちの攻撃をやり過ごすシグルドだったのだが、その時だ。

「そんな豆鉄砲で、この俺様のインペリアルを傷付けられるとでも・・・っ！！」

そこへカリンのジャマーグレネードが、シグルドに襲い掛かった。
放たれる閃光がシグルドの視界を奪い、レーダーも妨害される。

「ぬうっ、小賢しい真似を！！だが殺気と気配で貴様らの位置は特定しているぞ！！」

マテリアに放たれたガンシールドのビームを、カリンがビームシールドで受け止めた。
だがシグルドの攻撃を立て続けに受け続けた影響もあり、今の一撃でとうとう限界を迎えてしまい、ビームシールドの発生装置が粉々に粉砕されてしまう。
それでもカリンの瞳からは、希望の光が失われてはいなかった。

「マテリア！！轟雷！！迅雷！！」
「カリンちゃん！？」
「この子をお願い！！それと･･･！！」

少女をマテリアに託したカリンが決意に満ちた表情で、ボロボロになったゼルフィカールを脱ぎ捨てたのだった。

5. 決着

「火力を前方に集中させて！！あの新型の防御力の前では、闇雲に分散して攻撃しても効果が薄いわ！！」
「「「「「「「「イエス、マム！！」」」」」」」」

カリンを援護しようと、リアナの指示でゼルフィカール部隊の少女たちがシグルド狙い撃つ。
だがそれでもシグルドが身に纏うインペリアルが相手では、決定打にはならない。
シグルドは1か所に集中して放たれた弾幕をガンシールドで受け止めながら、そのガンシールドから無数のビームをリアナたちに放った。
攻撃と防御を同時に行える･･･これがこのインペリアルの最大の特徴なのだ。
勝ち誇るシグルドの攻撃を、何とかビームシールドで受け止めるリアナたち。

「チャラチャラチャラチャラ鬱陶しいわ！！この雑魚共が！！」
「くっ･･･何てとんでもない火力と防御力なの･･･！？それにジャマーグレネードで視界とレーダーを遮られてるはずなのに、この攻撃の精度は･･･！！」
「シンプル故に強力！！このインペリアルこそが究極最強のフレームアームなのだ！！あんなヴァルファーレ如き小賢しいフレームアームとは格が違うわぁっ！！」
「きゃあああああああああああああああっ！！」

ガンシールドのあまりの凄まじい威力の前に、リアナたちは受け切れずに吹っ飛ばされて、壁に叩き付けられてしまった。
とても辛そうな表情で、うずくまるリアナたち。
シグルドもシオンと同じく歴戦の強者なのだ。ジャマーグレネードで視界とレーダーを封じられても尚、殺気と気配だけでカリンたちの位置を特定出来ていた。
そのシグルドのシオンにも劣らない実力に、驚愕の表情を見せるリアナたち。

「ぐっ･･･カリンちゃん･･･！！」
「ラザフォード中尉の最期、貴様ら自身の目でしかと見届けるのだぁっ！！」

シグルドのガンシールドから放たれた無数のビームが、一斉にカリンやマテリアたちがいた位置に向けて放たれた。
それと同時に響く、何かが粉々に粉砕される派手な音。
必中の手応え。だがカリンが放ったジャマーグレネードの効果が切れ、視界が戻ったシグルドが目撃した物は・・・シグルドによって粉々に粉砕されたゼルフィカールの残骸「だけ」だった。

「馬鹿な！？ゼルフィカールだけだと！？ラザフォード中尉はどこだ！？」

その瞬間、インペリアルから鳴り響く、ロックオンされた事を示す警告音。
慌ててシグルドが上空を見上げた途端、マナ・ビームセレクターライフルから放たれた超威力のビームがシグルドに襲い掛かった。
それをガンシールドで辛うじて受け止めるシグルド。

「ま・・・まさか・・・まさかぁっ！！」
「はあああああああああああああああああああああっ！！」

さらにユナイトソードの刀身がシグルドに襲い掛かった。
慌ててシグルドはバックステップで斬撃を避けるが・・・目の前にいるカリンの姿に驚きを隠せないでいた。
戦闘機を擬人化したかのような青色のフレームアーム、背中から生える蝶の羽根、全身から溢れ出る美しい緑色のマナエネルギーの粒子。
そして左手にあるのは、轟雷に託されたマナ・ビームセレクターライフル。
さらに右手にあるのは、迅雷に託されたユナイトソード。
何の迷いも無い力強い瞳で、カリンはシグルドを見据えていた。

「ラザフォード中尉、まさか貴様、あのバンパイアの小娘の・・・！！」
「私はシルフィアとの未来をこの手で切り開く！！このスティレット・リペアーで！！」
「おのれぇっ！！この往生際の悪い小娘がぁっ！！」

怒りの形相で、ガンシールドから無数のビームを放つシグルド。
それをカリンは的確に避け続けながら、マナ・ビームセレクターライフルでシグルドを迎撃する。
そのカリンの戦いの様子を、カリンに武装を託したマテリアたちが、そしてカリンに命を救われた少女が、とても心配そうな表情で物陰から見つめていた。

「スティレットが使っていたこの機体、使いこなしてみせるわよ！！」
「たかが旧式のゼクスを改造しただけのその機体で、この最新鋭の機体であるインペリアルに勝てると思っているのかぁっ！！」
「勝てると思うかじゃないわ！！勝つのよ！！私たちは！！」

スティレット・リペアーは火力はゼルフィカールに劣るものの、機動性は上回っている。
その機動性はヴァルファーレにも劣らない代物であり、カリンはその優れた機動性を最大限に活かし、シグルドの攻撃を避けまくっていた。
そして一瞬の隙を突いてマナ・ビームセレクターライフルやユナイトソードで攻撃後、即離脱。
ゼルフィカールよりも火力も防御力も劣るスティレット・リペアーでは、インペリアルを相手に正面からまともにぶつかっても勝ち目は無い。
あくまでもスティレット・リペアーの特性を活かし、回避を重視。カリンは長期戦を視野に、シグルドに決して的を絞らせなかった。

そう・・・長期戦になれば、スティレット・リペアーを纏うカリンが圧倒的に有利になる。
バッテリーで稼働するインペリアルではどうしても稼働時間に制限が生じてしまうが、マナエネルギーで稼働するスティレット・リペアーなら無限に稼働させる事が出来るのだから。
それにシグルドはどんな状況でも冷静さを失わなかったシオンと違い、直情型で熱くなりやすい性格だ。そこを突けば総合性能の劣るスティレット・リペアーでも充分に勝ち目はある。
慌てる必要は無い。戦いが長引けば長引く程、カリンが有利になるのだ。

「慌てる必要は無い！！戦いが長引けば長引く程、自分が有利になる！！貴様はそう思っているのだろう！？」

カリンのユナイトソードを、シグルドがビームランスで受け止める。
そして至近距離からガンシールドを放つが、そこにあったのはマナエネルギーで形成された、カリンの残像。
いつの間にか背後に回り込んでいたカリンが、ガラ空きになったシグルドの背中にマナ・ビームセレクターライフルを放った。
それを全方位に展開したビームバリアーで受け止めるシグルド。
未だインペリアルに、決定的なダメージを与えるには至っていない。

「全く、本当に亀みたいなフレームアームだわ・・・！！」
「貴様は俺様のインペリアルのエネルギー切れを狙っているのだな！？ならばその機体の機動力を封じれば済むだけの話よ！！」

シグルドは妖艶な笑みを浮かべながら、またしてもガンシールドの照準を少女に向けた。
先程と同じ様に、カリンに少女を庇わせるつもりなのだが・・・それでもカリンは微動だにしない。
少女に向けて無数のビームが放たれる。だがそれをアーキテクトがガンブレードランスで、轟雷と迅雷がビームシールドで受け止めた。
あまりの威力に轟雷と迅雷が吹っ飛ばされ、壁に叩き付けられてしまうが・・・それでも轟雷と迅雷はうずくまりながらも、ドヤ顔でカリンに親指を立てたのだった。
その様子を少女が、泣きそうな表情で見つめている。

「何という威力だ・・・！！だが貴様の思惑通りにはさせんぞ！！シグルド！！」
「おのれぇっ！！群れなければ何も出来ん軟弱者共がぁっ！！」
「やれやれ、まさかこの私が軟弱者呼ばわりされる日が来るとはな・・・！！」

轟雷や迅雷と違って何とか耐え切ったアーキテクトを、シグルドが怒りの形相で睨み付けている。
その一瞬の隙を突き、カリンが再びユナイトソードでシグルドに斬りかかる。
再びガンシールドで受け止めるシグルドだったが、またしてもカリンが高速離脱して、シグルドから間合いを離した。
そして中距離からマナ・ビームセレクターライフルで、シグルドを牽制。
それをビームバリアで受け止めるシグルドだったが、その表情から苛立ちを隠せずにいた。

カリンはあくまでも長期戦狙いの一撃離脱を徹底し、決して正面からは攻撃してこない。
スティレット・リペアーの機動性の前に、ガンシールドによるビーム攻撃が中々命中しない。かと言ってビームランスによる必殺の間合いにも中々入ってこない。仮に入ってきても一撃加えた後にすぐに高速離脱してしまう。
ならばと先程のように少女を攻撃してカリンに少女を庇わせようとしても、今のようにアーキテクト

たちがカリンの代わりに防いでしまう。
　アーキテクトたちの乱入後、戦いの流れは完全にカリンに傾いてしまっていた。

「おのれ、おのれ、おのれえええええええええええええええっ！！」

　そうこうしている内に、いつの間にかインペリアルの残りエネルギーが心許なくなってきていた。
　攻撃の威力に比例してエネルギーの消費も激しくなる。シグルドはあれだけの威力の攻撃を何度も何度も繰り出していたのだ。無理も無いだろう。
　どれだけ大容量のバッテリーパックを搭載していようが、バッテリーで稼働している以上はエネルギー切れはどうしても避けられない運命なのだ。
　それとは逆にカリンが身に纏っているスティレット・リペアーは、マナエネルギーの粒子を全身から溢れさせながら、シグルドを嘲笑うかのように未だフルパワーで稼働を続けていた。

「イ、インペリアルの残りエネルギーが・・・くそっ！！」

　慌てて予備のバッテリーパックに交換しようとするシグルドだったが、そうはさせまいとシグルドが懐から取り出した予備のバッテリーパックを、いつの間にか目の前に迫っていたカリンがユナイトソードで叩き落した。
　弾かれたバッテリーパックが乾いた音を立てて、壁に叩き付けられる。

「貴方はそのフレームアームの性能を過信し過ぎなのよ！！シグルド！！」
「き、貴様・・・ぐあああああああああああっ！！」

　至近距離からマナ・ビームセレクターライフルを放ち、またしても即座に高速離脱するカリン。
　慌ててシグルドはガンシールドの照準をカリンに向けるが、エネルギー残量が残り僅かになった事を示す警告音が、先程からインペリアルから鳴り続けていた。
　ガンシールドから放たれるビームに、最早先程までの威力は無い。カリンは軽々とビームシールドで全て受け止めてみせた。

「馬鹿な・・・！！この俺様のインペリアルが、たかが旧型のゼクスを改造した機体如きに・・・！！有り得ん！！このような結末、俺様は認めんぞぉっ！！」
「終わりねシグルド。もう貴方に勝ち目は無いわ。大人しく投降するなら・・・」
「皇帝に投降など有り得ぬ！！ただ制圧前進あるのみ！！俺様はグランザム帝国第1皇子、シグルド・グランザムなのだあああああああああっ！！」

　ガンシールドを地面に投げ捨てたシグルドは、残された僅かなエネルギーを全てブースターとビームランスに集中させ、物凄い勢いでカリンに突撃した。
　その優れた槍術、そしてシグルドの凄まじい気迫によって、カリンは放たれたビームランスを避け切れずに、マナ・ビームセレクターライフルを真っ二つにされてしまう。
　まさにシグルドの凄まじい気迫。そして戦士としての、長兄としての、男としての意地。

「るあああああああああああああああああああああああああっ！！」

　さらにユナイトソードまでも弾き飛ばされてしまい、カリンは完全に丸腰になってしまう。
　だがそれでもカリンは諦めない。まだカリンの瞳から力強い光は失せていない。
　シルフィアの為にも、そしてリアナたちの為にも、カリンはここで負ける訳にはいかないのだ。

「はあああああああああああああああああああああっ！！」
「な、何ぃっ！？」

アリューシャがカリンに繰り出した、鎧を貫通して内部に衝撃を加える、古武術の極意。それをカリンはそっくりそのままシグルドに食らわせた。
マナエネルギーを右手に集中させ、凄まじい威力の掌底をシグルドの腹部に繰り出す。
一度食らっただけで、カリンは技の原理を大体理解してしまっていたのだ。
放たれた掌底の威力がインペリアルを貫通し、シグルドの腹部に直接襲い掛かった。

「がはあっ！！」

吹っ飛ばされたシグルドが後ずさって嗚咽するが、それでも尚シグルドは引かない。

「お、俺様は決して引かぬ・・・！！俺様は決して媚びぬ・・・！！俺様は決して・・・っ！？」
「私はシルフィアと一緒に・・・未来を掴むんだあああああああああああああああっ！！」
「な、何だとおおおおおおおおおおおっ！？」

だがシグルドが一瞬目を離した隙に、いつの間にかアーキテクトからガンブレードランスを借り受けていたカリンが、体勢を崩して嗚咽するシグルドに突撃した。
刀身にマナエネルギーが込められたガンブレードランスが、情け容赦なくシグルドに襲い掛かる。

「これで、終わりだあああああああああああああっ！！」
「ぐおあああああああああああああああああああっ！！」

そしてカリンの渾身の一撃がインペリアルを粉砕し、遂にシグルドの腹部を貫いたのだった。
壁に叩き付けられ、嗚咽し、口から血を吐き、その場にうずくまるシグルド。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」
「カリン！！カリーーーーーーーーンっ！！」

息を切らしながら、シグルドの腹に突き刺さったガンブレードランスから両手を離したカリンの身体を、居ても立っても居られなくなって駆け付けて来たシルフィアが、慌てて抱き締めた。
激しい戦いで身も心も疲れ切ってしまったカリンを、優しく包み込んで癒すかのように。

「シルフィア・・・。」
「カリン・・・良かった・・・貴方が無事で、本当に・・・！！」

とても穏やかな表情で、泣きそうな表情のシルフィアを抱き寄せるカリン。
その光景をカリンに敗北したシグルドが、苦しみながらも鬼の形相で睨み付けている。
そんなシグルドの最期の姿を、涙目になりながらもシルフィアはしっかりと見つめていた。
自分の兄だからこそ、その死をしっかりと見届けなければならないと・・・決して目を背けてはならないと・・・そうシルフィアは思ったのだ。

「・・・いつか・・・いつか貴様は・・・貴様自身が下した選択を・・・後悔する事になるぞ・・・！！こんな戦場で涙を流すような・・・軟弱な女如きが・・・皇帝など・・・ぐっ・・・がはっ・・・！！」

ガンブレードランスに貫かれた腹部から、凄まじい量の血が流れ出ている。

自らの死を悟りながらも、それでもシグルドは自らの信念と覚悟を崩そうとしなかった。

「力だ・・・！！この帝国を守るのに必要なのは・・・全てを跳ね除ける圧倒的な力・・・！！それが分からん貴様もシルフィアも・・・いずれ必ず・・・！！」
「そうね。力無き信念に何の意味も無い。確かに貴方の言う通りよ。でも、だからこそ・・・。」

シルフィアの肩を優しく抱き寄せながら、何の迷いも無い力強い瞳で、カリンはシグルドにはっきりと告げた。

「だからこそ私はシルフィアの騎士（ナイト）として、これからもシルフィアを守っていくのよ。」
「・・・・・。」

果たして、カリンのその言葉がシグルドに聞こえていたのだろうか。
いや、カリンを強敵と認め、武人として戦場で死ぬ事が出来て、本望だったのか。
とても満足そうな笑みを浮かべながら、シグルドは静かに息絶えていた。
互いに思想を違え、敵同士となってしまったが・・・それでもシグルドはシュナイダーのような口先だけの男とは違う、正真正銘の武人だった。
もしシグルドとカリンが、もっと違った出会い方をしていれば・・・平和な時代に出会えていれば・・・互いに研鑽し合える、良き同志となれていたかもしれないのに。

「・・・さよなら。シグルド。」

その武人としての生き様に敬意を表し、カリンはシグルドの亡骸に静かに敬礼したのだった。

6. 終戦

ボロボロのヴァルファーレを纏ったシオンに剣を突き付けられるジークハルトの背後で、グランザム帝国の城から白色の信号弾が打ち上げられた。
それはシルフィアの命令で打ち上げられた、ルクセリオ公国に対する降伏を示す証。
それがシグルドの死を意味する事を即座に理解したシオンは、10年も続いたこの戦争がようやく終わりを迎えた事を確信したのだった。
シルフィアならばきっと、グランザム帝国を良き方向へと導いてくれる事だろう。
深くため息をついたシオンは、マナ・ハイパービームサーベルを懐に収めたのだった。

「何故だシオン！？何故私を殺さぬ！？情けなど要らぬわぁっ！！」
「ここで僕が陛下を殺せば、主を失ったルクセリオ公国はそれこそ大混乱に陥ってしまうでしょう。陛下を裏切ってしまった僕が言うのも何ですが、それは僕の本意じゃない。」
「貴様との戦いに敗れたこの私に、生き恥を晒せとでも言うのかぁっ！？」
「生き恥を晒し続けてでも生き続けて下さい。陛下にはこれからもルクセリオ公国を導くという、大切な役目があるでしょう。」
「シオン・・・っ！！」

よろめきながらも何とか立ち上がったジークハルトは、怒りの形相でシオンを睨み付けている。
パワードスーツ・ルクスはシオンの一撃でもうボロボロ、しかも最初の一撃で大出力のハイパーメガバズーカランチャーを撃ってしまった影響もあり、エネルギー残量も残り僅かだった。
ジークハルト自身も地面に叩き付けられて全身を強打した影響で、パワードスーツ・ルクスに守ら

れたお陰で命に別状は無いものの、相当なダメージを受けているようだ。
　その全身を襲う激痛を表情に出す事無く、威風堂々とした態度を崩さないのは、ジークハルトの国王としての威厳なのか、男としての意地なのか。

　だが何にしてもシオンが相手では、これ以上の戦闘行為はどう考えても無理だった。
　ジークハルトもそれを頭では理解していたが・・・それでもどうしても貫き通さなければならない信念、覚悟があるのだ。
　エネルギー残量が残り僅かになりながらも、ジークハルトはよろめきながらハイパービームサーベルを構えたのだが。

「私は・・・私はまだ負ける訳にはいかぬ！！帝国を滅ぼすまでは、私は・・・っ！？」
「貴方はシオンに敗れたのです。いい加減それを認めたらどうなのですか？ジークハルト。」
「な・・・！？」

　そこへパワードスーツ・ルクスから鳴り響いた、自分がロックオンされた事を示す警告音。
　慌ててジークハルトはバックステップをして避けるが、そこへ突然エミリアの精霊魔法によって放たれた稲妻が落ちて来たのだった。

「うおわっ！？」

　びっくりしたシオンの目の前に降り立ったのは、イクシオンを身に纏ったエミリアだった。
　そのエミリアを護衛していたアイラ、アリューシャらスティレット・ダガー部隊の少女たちも、シオンとエミリアを守る為にジークハルトの前に立ちはだかる。
　とても物静かな表情で、エミリアは目の前のジークハルトを見据えていた。

「エミリア・・・貴様・・・！！」
「ジークハルト。もう終わりにしませんか？たった今シルフィアから連絡がありました。未だルクセリオ公国との戦争継続を主張していたシグルドは、カリンによって討ち取られたと。」
「だから何だ！？先程も言ったであろう！？奴らが今更降伏しようがしまいが、私は徹底的に帝国を叩きのめすと！！」
「シルフィアはシュナイダーのような愚物とは違う・・・彼女ならば帝国を、より良き方向へと導いてくれるでしょう。貴方程の人がそれを理解していないはずが無いでしょう？」
「私はあの娘を信じぬ！！今更信じられるはずがなかろうが！！愚かな帝国の連中など！！」

　ジークハルトとて前皇帝ヴィクターが死亡し、大混乱状態に陥ったグランザム帝国に対して、一度は降伏勧告を送ったのだ。
　だがその結果はどうだ。新皇帝となったシュナイダーはそれを突っぱねたばかりか、愚かにも民間人のミハルを捕らえ、マチルダをシオンと戦わせる為の人質にし、挙句の果てに自分を裏切った大臣たちに犯させようとまでしたのだ。
　だからこそジークハルトは、今更シルフィアの言葉など微塵も信じるつもりは無かった。
　これだけシュナイダーにコケにされたのだ。シルフィアが今更何を言おうが聞き入れられないと、ジークハルトが意地と信念を通そうとするのも仕方が無いだろう。

「それでも私はジークハルト殿に申し入れさせて頂きたいのです。どうか私を信じ、この10年も続いた愚かな戦争を終わりにして頂きたいと。」
「な・・・貴様・・・！！」

そこへスティレット・リペアーを身に纏ったカリンにお姫様抱っこされながら、シルフィアが上空からジークハルトの下に飛んできたのだった。
そのシルフィアを護衛する為にリアナらゼルフィカール部隊も・・・それにアーキテクトたちも。
カリンにスティレット・リペアーを貸し与えたマテリアも、リアナにお姫様抱っこされながら、とても悲しげな表情でジークハルトを見つめていた。

「ジークハルト殿。まずは愚兄シュナイダーとシグルドの貴国に対する愚かな行為に対して、改めて貴方に謝罪させて頂きます。」
「貴様の口先だけの謝罪など今更信じぬ！！貴様ら帝国を徹底的に滅ぼすまで、私のこの怒りと憎しみは決して終わらぬのだ！！」
「ジークハルト殿・・・。」

シルフィアにハイパービームサーベルを突き付けるジークハルトだったが、そこへシルフィアを守る為に、ビーストマスターソードを手にしたカリンが立ちはだかった。
何の迷いも無い力強い瞳で、カリンはジークハルトを見据えている。

「ラザフォード中尉、貴様・・・！！」
「ジークハルト陛下、シルフィアは貴方に命を狙われる危険を冒してまで、貴方に対して誠心誠意の態度を示す為に、敢えて自らここまでやってきたのです。私は反対したんですけど、シルフィアったら本当に頑固だから・・・。」
「だからその娘を信じろというのか！？今更その娘が何をしようが、どれだけ命を懸けようが、私は貴様ら帝国を決して信じぬ！！」
「ここでシルフィアを殺せば貴方は、身体を張って降伏の意思を示した無抵抗の女を殺した愚か者として、永遠にその名を歴史に残す事になりますよ？それでもよろしいのですか？」
「その娘や貴様が私を騙し討ちし、再び我が国への侵略を企てようとする可能性も捨て切れんわ！！シュナイダーやシグルドと同じ様になぁっ！！」

そう、それなのだ。ジークハルトがシルフィアを認められないのは、まさにそれがあるからなのだ。
シュナイダーもシグルドも、この10年も続いた戦争を終わらせる機会があったにも関わらず、それを拒絶し、ルクセリオ公国に対する敵意をあれだけ露わにしたのだ。
しかもシュナイダーはミハルを人質に取るなどという卑劣な行為まで行い、シグルドはジークハルトに対して挑発行為まで行った。
だからこそジークハルトは今更シルフィアが何を言おうが、それを信じる訳にはいかないのだ。
打ち上げられた信号弾も、シルフィアが危険を冒してまで自らジークハルトの前に姿を現したのも、もしかしたらジークハルトを油断させる為の罠なのかもしれないのだ。

「ならジークハルト陛下。彼女に敵意が無いという事を証明出来ればいいんですね？」

そこへようやく駆けつけて来たスティレットが、アレキサンダーとのドッキングを解除してジークハルトの前に降り立ってきた。
ナナミとの戦いで損傷したイクシオンを見て、心配そうな表情をするシオンを安心させる為に、スティレットがシオンに穏やかな笑顔を見せる。

「互いに心を通じ合わせ、言葉ではなく想いによって会話をする・・・このイクシオンに秘められた力はジークハルト陛下も御存知でしょう？」
「・・・エンゲージ・システムか・・・！！」

スティレットの言葉の意味を即座に理解したカリンとシルフィアが、互いに頷き合い・・・スティレットに静かに右手を差し出したのだった。
差し出された2人の手を、スティレットがそっ・・・と左手で取り、さらにハイパービームサーベルを握り締めるジークハルトの右手に、そっ・・・と右手を添えた。
確かにイクシオンのエンゲージ・システムならば、シルフィアの嘘偽りのない本心をジークハルトに証明する事が可能だ。それは前回のスティレットとカリンの戦いにおいて実証されているのだ。

「エンゲージ・システム・・・起動。」

イクシオンから放たれたマナエネルギーの粒子が、スティレットたちを優しく温かく包み込む。
そしてスティレット、カリン、シルフィア、ジークハルト・・・この4人の心が今、1つに繋がった。
互いの記憶が、互いの想いが、互いの中に入り込む。
そして4人は理解した。スティレットとカリン、そしてシルフィアの悲壮な人生を・・・ジークハルトのグランザム帝国に対する怒りと憎しみを。
そして・・・シルフィアがジークハルトに対して、最早本気で敵意を抱いていないという事を。

「・・・陛下、本当によろしいのですか？これで言質は取れましたよね？シルフィアが陛下に対して本気で和平を望んでいるという事が。それでも陛下はシルフィアを殺すというのですか？」
「・・・・・。」
「これだけ周りに証人が大勢いるんです。これで陛下がシルフィアを殺してしまえば・・・陛下は正真正銘の、まさしくシュナイダーと同類の犬畜生になってしまいますよ。」

エンゲージ・システム解除後、シオンの言葉でジークハルトが、とても悔しそうな表情を見せる。
確かにシオンの言う通りだ。エンゲージ・システムによって、シルフィアに敵意が無いという事が否応なしに証明されてしまったのだ。
ここでジークハルトがシルフィアを殺してしまえば、それこそジークハルトは無抵抗の女を殺した愚か者として、永遠に歴史に汚名を残す事になってしまうだろう。

いや、ジークハルト1人だけの問題で済めばまだいいのだが、それ以前に重篤な国際問題になってしまうはずだ。そうなればルクセリオ公国という国全体が世界中から非難に晒され、下手をすると国民たちを路頭に迷わせる事にもなりかねない。
ジークハルトは国王としてこれからも国を、国民たちを守っていかなければならないのだ。
観念したかのようにジークハルトは、ハイパービームサーベルを懐に収めたのだった。

「・・・確か、シルフィアと言ったな。」
「はい。ジークハルト殿。」
「リーズヴェルト中尉やラザフォード中尉が、貴様の父や兄の愚かさせいで、どれだけ苦しめられる事になったのか・・・それは理解したな？」
「ええ、充分に理解させられました。リーズヴェルト中尉にもカリンにも、私はどれだけ詫びを入れても詫び切れません。」
「・・・そうか。貴様がそれを理解したのであれば、最早何も言うまい。」

ジークハルトが打ち上げた白色の信号弾が、鮮やかに上空を照らし出す。
その信号弾の意味を、その場にいた全員が瞬時に理解した。
シオンとスティレットが穏やかな笑顔で、互いに身体を抱き寄せ合いながら、上空の信号弾を見つめ続けている。
10年も続いたこの戦争が・・・今、ようやく終わりを迎えたのだ。

「私はこれから国に戻り、事後処理をせねばならん。そしてそれは貴様とて同じだろう。正式な終戦協定式の日取りは、また後日連絡する。」
「・・・ジークハルト殿・・・それでは・・・！！」
「だが忘れるなよ。貴様が貴様の父や兄と同様に道を誤れば、私は今度こそ貴様ら帝国を徹底的に叩きのめす・・・その事をしかと胸に刻んでおけ。いいな？」
「・・・はい！！」

決意と覚悟を胸に秘めた表情で、シルフィアはジークハルトを見据えたのだった。

7. 光溢れる未来へ

かくして後に10年戦争と呼ばれる事になる、今回のルクセリオ公国とグランザム帝国の戦争は、グランザム帝国の降伏という形でようやく終わりを告げた。
正式な終戦協定式はまた後日になるが、それでも思慮深いジークハルトなら、グランザム帝国に対して決して奴隷のような扱いはしないだろう。
今回の戦争で両国共に、数多くの犠牲者を出してしまった。だがそれでも生き残った者たちは死んでいった人々の分まで、前を向いて生きていかなければならないのだ。
その決意を胸に、シオンはスティレットの肩を優しく抱き寄せながら、互いに握手をするジークハルトとシルフィアを見つめていた。

「やっほーカリンちゃん。そのスティレット・リペアー、凄く似合ってるね。」

戦争が終わった以上は、もうアリューシャたちがカリンたちと敵対する意味は何も無い。
リアナたちゼルフィカール部隊の少女たちと、スティレット・ダガー部隊の少女たちが穏やかな笑顔で談笑している最中、とても嬉しそうにカリンに駆け寄ってきたアリューシャだったのだが。

「迅雷ちゃんから聞いたよ。物凄い戦いぶりだったんだって？私はカリンちゃんならきっとその機体を使いこなしてくれると・・・」

何故かカリンが顔を赤らめながら、とても恥ずかしそうにシルフィアを見つめていたのだった。
そんなカリンの意味不明の挙動不審さに、思わずきょとんとするアリューシャ。

「・・・カリンちゃん。さっきから何をそんなにモジモジしてるの？」
「シ、シルフィア・・・貴方、ほ、本気なの！？」
「ほえ？」

先程までアリューシャと戦っていた時のような威風堂々とした態度は、今のカリンからは微塵も感じられない。
一体全体、何故こんなにも恥ずかしそうにモジモジしているのか・・・意味が分からないアリューシャだったのだが、突然シルフィアがカリンに抱き着いたのだった。
とても穏やかな笑顔で、シルフィアはカリンをじっ・・・と見つめる。

「・・・カリン。エンゲージ・システムで私の気持ちは伝わりましたよね？今更私の口からもう一度言わせるつもりですか？」
「だって私たち、その・・・お、女の子同士なのよ！？」

「人を愛する気持ちに性別など関係ありません。それにカリン、私の騎士（ナイト）になるって言ってくれましたよね？今更それを撤回するつもりなのですか？」
「い、言ったけど、それとこれとは・・・！！」

一瞬シルフィアが何を言っているのか理解出来なかったシオンたちだったのだが、それでもシルフィアが何を言っているのかを、すぐに何となく理解したのだった。
とても恥ずかしそうにモジモジしながら顔を赤らめるカリンの顔を、シルフィアがとても愛しそうに、じっ・・・と見つめている。

「私、シュナイダー兄様の記者会見で、テレビ越しに貴方の姿を見た時から、貴方に一目惚れだったんです。」
「ひ、一目惚れって・・・貴方もイクシオンのエンゲージ・システムで私の記憶を見たでしょう！？私は風俗店で2年近く働いて、それで沢山の男の人に抱かれて・・・！！」
「貴方のその汚れた身体は、他に誰も頼れる人がいなかった中で、貴方が必死に今を生き抜こうとした事に対する証なのでしょう？私はむしろ、そんな貴方を誇りにさえ思っています。」

大臣たちは風俗店で働いていたカリンを汚れた女だと侮蔑していたが、自分が正式な皇帝になったからには、今後はカリンに対するそのような侮蔑は絶対に許さないと・・・シルフィアはその揺るぎない決意を胸に秘めていた。
カリンが風俗店で沢山の男に抱かれてきたのは、カリンが必死に収入を得ようとしたからだ。
生活する為に、生きる為に、カリンは必死になって働いてきたのだ。
父親に借金を押し付けられ、母親に見捨てられ、他に誰も頼れる人がいない中で、それでもカリンは1人ぼっちで、必死になって生き抜いて来たのだ。
それなのに、何故それを侮蔑などされなければならないのか。むしろシルフィアはそんなカリンの事を誇らしいとさえ思っていた。

「・・・わ、私は・・・こんな汚れた私が、皇女である貴方と結ばれるなんて・・・しかも女の子同士でしょ！？それで貴方が周囲から白い目で見られたりしたら・・・」
「そんな下らない事は私は一切気にしません。要は私がどう思っているのかが大事なのです。」
「く、下らない事って・・・シルフィア、貴方は皇女なんだから、もっと世間体という奴を・・・」
「ああもう、本当にまどろっこしいですね。ならこうしましょう。」

呆れたように深くため息をついたシルフィアは、そのまま静かにカリンに顔を近付けたのだった。
シルフィアの甘い吐息が、カリンの唇にふうっ・・・と吹きかけられる。
それがカリンには何だかとてもくすぐったい。何故か嫌だとは思えなかった。

「・・・今から10秒後に、私は貴方にキスをします。」
「ほえ！？」
「私を受け入れられないなら、それまでに私を徹底的に激しく拒絶して下さいね？そうすれば私も諦めが付きますから。」
「キキキキキキキキスって、ちょちょちょちょちょちょちょっとシルフィア・・・！！」
「ではいきますよ？10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・」

シルフィアの唇が、ゆっくりとカリンの唇に迫っていく。
とても潤んだ瞳で、カリンを見つめるシルフィア。
鍛え抜かれた軍人である、しかもスティレット・リペアーを身に纏っている今のカリンなら、何の戦闘訓練も受けていない丸腰のシルフィアを無理矢理振りほどく位、造作も無い事だろう。

だがカリンは何故か身体が動かなかった。身体に力が入らなかった。
自分を好きだと言ってくれたシルフィアの瞳から、視線を逸らす事が出来ないでいた。
むしろシルフィアの瞳に、自分の意識が吸い込まれていきそうな。
シルフィアの中に溶け込んでしまいそうな・・・そんなふわふわの、しかしとても心地よい感覚。

「・・・5・・・4・・・3・・・2・・・1・・・」
「シ、シルフィア・・・。」
「・・・好きです。カリン。」
「・・・んっ・・・。」

シオンたちが顔を赤らめながら見守る中、シルフィアはカリンと唇を重ねた。
キスなんて風俗店で働いていた頃、カリンは客の男性から数え切れない位散々されてきた。それにオプションサービスでレズプレイを強要された時に、同僚の女性たちからも散々されてきた。
だがいずれも客の性欲を満たす為、あるいは仕事としてであり、決して気持ちいいとは言えない、むしろ気持ち悪くて吐き気がする代物だった。
今ではもう完全に慣れてしまったが、それでも新人だった頃は涙を流しながら、洗面所で口をすすぎながら激しく嗚咽した物だ。そんなカリンを見かねた先輩の風俗嬢たちから、全てを諦めてしまえば楽になれるとアドバイスされたのを、カリンは今も鮮明に覚えているのだが。

しかし、このシルフィアのキスは・・・これまでカリンが全く味わった事の無い代物だった。
カリンへの愛情と想いがたっぷりと込められた、何という優しくて甘いキスなのか。
きっとこれがシルフィアにとってのファーストキスだったのだろう。とても初々しいというか、ぎこちないキスだったのだが、それでもシルフィアの想いは充分にカリンに伝わったようだ。
シルフィアは嫌なら拒絶しろと言っていたが・・・こんなの拒絶など出来る訳が無い。それどころか全然嫌だとは思えなかった。

「・・・カリン、何故抵抗しなかったのですか？本当にお馬鹿さ・・・んんっ！？」

シルフィアが唇を離した途端、今度はカリンの方からシルフィアと唇を重ねた。
シルフィアの身体をぎゅっと強く、しかし優しく抱き締め、そんなカリンの想いに応えるかのように、シルフィアもカリンの身体をぎゅっと抱き締める。
その様子をアリューシャやリアナたちが、うおおおおおおおおおおおおおおおとか叫びながら、顔を赤らめて見つめていたのだが。
集まって来た戦場カメラマンたちもスクープだとか大騒ぎしながら、カリンとシルフィアに一斉にカメラのフラッシュを浴びせたのだった。

「・・・シルフィア、責任取りなさいよね？私をこんな気持ちにさせたんだから。」
「ええ、もう逃がしませんよ？だってカリンは私の騎士（ナイト）なのですから。」
「て言うか、もう世界中に生放送されてるんだけど・・・。」
「見せつけてあげればいいじゃないですか。世界中の人々に私たちの仲を。」
「んもう、馬鹿・・・。」

カリンの身体を抱き寄せながら、ドヤ顔で戦場カメラマンたちのインタビューに答えるシルフィア。
そんな騒々しい光景を、スティレットの身体を抱き寄せながら、苦笑いしながら見つめていたシオンだったのだが。
そんなシオンの下にマチルダとナナミが、とても複雑そうな表情で歩み寄ってきたのだった。

「マチルダ・・・ナナミ・・・。」
「「・・・・・。」」

スティレットやシオンとの戦いで、フレズヴェルクとパワードスーツ・ツヴァイをボロボロにされたナナミとマチルダ。その傷ついた姿が何とも痛ましい。
２人共シオンの事が好きだと、シュナイダーの命令でコーネリア共和国に襲撃させられた際に、シオンにはっきりと告げた。
だが今シオンには、２人のその想いに応える事は許されないのだ。
何故なら今のシオンには、スティレットという恋人がいるのだから。

「２人の気持ちは僕も嬉しいよ。だけど僕は君たちの気持ちに応える訳には・・・。」
「何を言っているのですか、シオン。」

だがそこへ突然エミリアが割って入り、シオンにとんでもない事を告げたのだった。

「我がコーネリア共和国では、夫は正妻１人の他に、愛人を４人まで持つ事が認められています・・・後は言わずとも分かりますね？」
「・・・ちょっと何言ってるのか全然意味が分かりません（泣）。」

いきなりの爆弾発言に、思わずヘタレた表情になってしまうシオン。
マチルダとナナミは口をポカーンとしながら、思わず顔を見合わせ・・・次の瞬間エミリアの言葉の意味を理解した２人は互いに頷き合い、エミリアにとんでもない事を告げたのだった。

「「エミリア王妃殿下。私たちはシオン隊長の愛人として、コーネリア共和国に亡命します！！」」
「分かりました。私は貴方たちの亡命を歓迎します。」
「ちょっと（泣）！！」

この人たちは、何を訳の分からない事を言っているのだろう・・・シオンは一体全体何が何だか、全然意味が分からないでいた。
４人までなら愛人を持つ事を認めるって。コーネリア共和国に亡命するって。
戸惑うシオンにマチルダとナナミが物凄い笑顔で、一斉に迫って来たのだった。

「そういう訳なのでシオン隊長、これからもよろしくお願いします。」
「て言うかナナミ！！君はさっき僕に対して死ねとか殺すとか言ってたよね（泣）！？」
「ええ、これからは愛人として死ぬ程貴方を愛します。リーズヴェルト中尉が正妻だというのが少し不服ですが・・・まぁ私は愛人ですからね。仕方がないでしょう。」
「君は一体何を訳の分からない事を言っているんだ（泣）！？」

ナナミとマチルダに迫られたシオンは、泣きそうな表情でジークハルトに助けを求めたのだが。

「陛下（泣）！！」
「よし。」
「いいの（泣）！？」

あっさりとジークハルトに突っぱねられてしまったのだった。

「シオンよ。今は亡きグランザム帝国の前皇帝ヴィクターは7人もの妻を持ち、全員に1人ずつ子供を産ませたと聞く・・・お前も英雄ならば、お前を慕うそこの3人と・・・あとはそこのバンパイアの娘もだったな。全員まとめて幸せにする位の気概を持たんか。この愚か者が。」
「陛下も何を訳の分からない事を言っているんですか(泣)！？」

さらに畳み掛けるかのように、アーキテクトがとんでもない事を告げたのだった。

「エミリア様。確か今、愛人を4人までなら認めると・・・そう仰いましたね？」
「アキト、ちょっと待て、まさか君も・・・(泣)！？」
「そうだ。私もお前の愛人として立候補させて貰おう。」
「はあああああああああああああああ(泣)！？」

さらにアーキテクトに迫られて、戸惑いを隠せないシオン。
全く予想もしなかった人物からの求愛、と言うか今までそんな素振りは、アーキテクトは一度もシオンに見せていなかったはずだ。全然意味が分からないシオンだったのだが。

「お前はこの私を初めて打ち負かした男だ。しかも私のゼクスよりも性能の劣る、パワードスーツを使うというハンデさえ負ってもだ。だからその責任はきちんと取って貰わないと困るな。」
「その責任って一体どの責任なんだアキト(泣)！？」
「私は今までステラとマテリアに遠慮していただけだ。だが愛人を4人まで認められるのであれば、最早私がこの2人に遠慮する必要など何も無い。遠慮なくお前を愛させて貰おう。」

一斉にシオンに迫るマチルダ、ナナミ、アーキテクトに、マテリアが溜め息をつきながらゆっくりと歩み寄って来たのだった。
とても慈愛に満ちた瞳で、じっ・・・と3人を見据えている。

「皆さんに忠告しておきますが、私たち4人はあくまでもシオンさんの愛人です。正妻はステラちゃんだという事を、ゆめゆめお忘れ無きよう・・・。」
「て言うかマテリア、君はいつ僕の愛人になったんだ(泣)！？」
「だって言ったじゃないですか。私はシオンさんの事が好きですって。」
「承諾した覚えは無いんだけど(泣)！？」
「諦めた覚えもありませんが？」
「うわあああああああああああああああ(泣)！！」

このままではスティレットが決して黙ってはいない・・・シオンは言いようの無い不安を感じていた。
ただでさえ皇帝ヴィクターに施された洗脳による影響で、今のスティレットは精神的にとってもすっごく不安定な状態になっているというのに、こんな本人の目の前で公然と浮気を公言するような状況を見せつけられてしまったのでは。

「・・・もう、シオンさんったら、いい加減覚悟を決めたらどうなんですか？」
「は(泣)！？」
「シオンさんが一番に愛してくれているのは私なんですよね？だったら私はそれでいいって、以前マテリアちゃんが告白してきた時に、シオンさんに言ったじゃないですか。」
「君は僕の恋人として本当にそれでいいのか！？て言うかさっきまで僕を巡ってナナミと殺し合ってたよね！？僕の事を渡さないとか言ってたよね(泣)！？」
「大丈夫です。私が正妻で、キサラギ曹長が愛人だという事で解決しましたから。」
「一体何がどう解決したんだステラ(泣)！？」

何だろう、普通は自分が好きな男に他の女が親しそうにしてきたら、激しい嫉妬を抱く物なんじゃないだろうか。シオンは呆れた表情のスティレットに戸惑いを隠せずにいた。
シオンの前妻であるアルテナなどは、シオンが帰宅時に軍服に香水の匂いがついていよう物なら、情け容赦なく包丁で斬りかかって来た物なのだが。
ジークハルトも士官学校時代に、2人の女が自分を巡ってビームサーベルで殺し合った事があるとシオンに語っていたのだが、普通はそれが当たり前なんじゃないのか。
だからこそナナミもあの時、シオンを殺そうとしたのではないのか。少なくともルクセリオ公国ではそれが普通だった。

いや、もしかしたら文化や思想の違いなのだろうか。ルクセリオ公国出身のシオンと違い、スティレットはグランザム帝国出身なのだ。ヴィクターにしてもアーキテクトにしてもそうだがグランザム帝国では、1人の男が複数の女を愛するのが当たり前だという風潮が根付いているのだろうか。

「まあそういう事だ。お前も男ならステラの言う通り、いい加減覚悟を決める事だな。シオン。」
「アキ・・・んんっ・・・！？」

そんな事を考える暇さえも与えられないまま、シオンはアーキテクトに問答無用で唇を重ねられたのだった。

「「「「・・・あああああああああああああああああああああああっ！！」」」」

いきなりのアーキテクトの大胆な行動に、驚きを隠せないスティレットたち。

「アキトさんがキスするなら、私もシオンさんとキスするーーーーーー！！」
「私にもシオンさんを吸わせて下さい！！最近全然吸ってないんですから！！」
「オラトリオ少佐！！抜け駆けなんてずるいですよ！！」
「死ぬ程貴方を愛するって言いましたよね！？シオン隊長ーーーーーーー！！」

正妻1人と愛人4人に一斉に詰め寄られるシオンに、戦場カメラマンたちが一斉にカメラのフラッシュを浴びせる。

「全く、シオンったら何をやっているのよ・・・。」

そんなシオンのヘタレた姿を、カリンがシルフィアの身体を優しく抱き寄せながら、苦笑いしながら見つめていたのだった。